

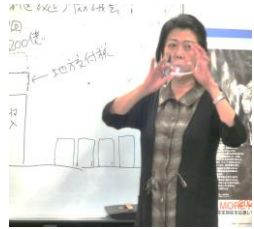
平和学校 看板に偽りあり——大阪都構想 開かれる

10月4日午後、大阪平和委員会主催で「平和学校」が18人の参加で開かれました。

大阪市廃止か否かを決する「住民投票」が12日に告示を迎えることもあり、授業のテーマは「看板に偽りあり——これが大阪都構想」、講師は大都市制度(特別区設置)協議会(法定協議会)などの議論をずっと追ってきた元「毎日」記者の幸田泉氏。

幸田氏は、11頁にわたるテキスト(面白いイラストがいっぱい掲載され好評)をみんなに配り、ホワイトボードを使い、1時間の授業をおこないました。以下はその要旨。

①大阪都構想の二大看板は、二重行政をなくす。二重行政の無駄がなくなり大阪は成長する、②ニア・イズ・ベター——大阪市4分割で自治体が小さくなり、市民の声が行政に届きやすくなる。大阪都構想の制度案(第35回法廷協議会に提出)を見ると、この二つの看板はまさしく看板倒れであることがわかる。大阪市を廃止することによって、二重行



政の無駄がなくなるどころか、ますます行政運営コストが膨らむ。特別区長はどれだけ市民の要望を聞いた区政をやるうとも、特別区にはカネがない。」

「2015年5月の住民投票では69万対70万の僅差で大阪市廃止を阻止した。住民サービス劣化や区役所がなくなることへの不安を感じた人が多かったためだ。今回は『区役所は存続する』、『大阪市は実施してきた住民サービスは維持する』(特別区設置協定書)と明記して、前回反対した人を賛成に変えるための姑息な方法もとってきている」

幸田氏はこの授業のあと30分にわたり丁寧に参加者の質問に答えました。

任命拒否の撤回を

菅義偉首相が、日本学術会議が推薦した会員候補105人のうち6人を任命拒否した問題で大阪平和委員会は次の抗議文を菅首相に送付しました。

《学術会議への不当な政治介入をやめ、任命拒否を撤回せよ》

内閣総理大臣・菅義偉 殿
菅義偉首相は、日本学術会議が推薦した会員候補105人のうち6人の任命を拒否した。これは暴挙というほかない。同会議が推薦した候補が任命されなかった例は過去にない。それは、「独立して職務を行う」(日本学術会議法3条)学術会議の学問の自由と自主性を保障する上で、不可欠な原則だからである。同会議発会式に吉田茂首相(当時)が寄せた祝辞でも、「日本学術会議はもろろん国の機関ではありませんが、その使命達成のためには、時々の政治的便宜のため、高度の自主性が与えられておる」と述べていた。1983年に会員の公選制から推薦制に変えた同法改正の際の国会答弁でも、丹羽兵助総理府総務長官(当時)が、政府の干渉を排する立場から、「学会の方から推薦していただいたものは拒否はしないと明言していた。」

うち6人の任命を拒否した。これは暴挙というほかない。同会議が推薦した候補が任命されなかった例は過去にない。それは、「独立して職務を行う」(日本学術会議法3条)学術会議の学問の自由と自主性を保障する上で、不可欠な原則だからである。同会議発会式に吉田茂首相(当時)が寄せた祝辞でも、「日本学術会議はもろろん国の機関ではありませんが、その使命達成のためには、時々の政治的便宜のため、高度の自主性が与えられておる」と述べていた。1983年に会員の公選制から推薦制に変えた同法改正の際の国会答弁でも、丹羽兵助総理府総務長官(当時)が、政府の干渉を排する立場から、「学会の方から推薦していただいたものは拒否はしないと明言していた。」

私たちは日本学術会議法に反し、憲法23条の「学問の自由はこれを保障する」との明確な条項を踏みにじる違憲、違法の任命拒否を、ただちに撤回することを求めるものである。

今回の事態は、憲法を破壊してきた強権的な安倍政治を全面継承するとする菅政権が、異論を強権で排除するファシヨ的体質を持っていることをまざまざと示したものである。歴史の教訓は、学問の自由を侵すことが、戦争への第一歩であること

を教えている。1935年の美濃部達吉博士(東京帝国大学教授、憲法学)の「天皇機関説」への

の権力による攻撃が、中国侵略、アジア太平洋戦争への道を開いたことを想起すべきである。私たちは、この政権の一刻も早い退場を求め、草の根からの平和運動と市民と野党の共同を進展させるため奮闘する決意を、ここに表明するものである。

核兵器廃絶国際デー

大阪原水協は9月26日(土)午前11時から正午までなんば高島屋前で「核兵器廃絶国際デー」宣伝行動を24人の参加で実施しました。

参加者は、チラシを配布する組と署名版をもって署名を集める組に分かれました。「抑止力というのは、いざという時に、核兵器の使用は許されるという立場です。新型コロナウイルスのパンデミックが明らかになったものの一つは、軍事力、とりわけ核兵器が、ウイルスとたたかう上で、何の意味も持たないことです」と訴えるチラシも好評でした。



【11月の行事案内】	
1日(日)	住民投票開票
4日(水)	大阪安保常任幹事会 10:00 大阪平和委員会常任理事会 18:00
7日(土)	東大阪平和学習 13:30 永和公民館 「敵基地攻撃ってナニ？」上羽事務局長報告 八尾平和交流会 14:00 河内平和館
9日(月)	カップ26(～20日@グラスゴー)
15日(日)	堺平和委員会 10:00～映画「沖縄」上映 同総会 11:30～堺教育文化センター
20日(金)	安保23行動 12:00 淀屋橋
21日(土)	日本平和大会オンライン 10:00～16:00
26日(木)	原水協定期総会 19:00 府社会福祉センター

としてマイクで訴えました。「203兆円に上る世界の軍事費、核兵器開発に注がれる7.2兆円のお金。これらのお金はコロナ感染症の対策に回すべきだ。フランシスコ教皇も、今は武器を製造し、取引するときではありません。そのため費やされる莫大な資産は、人々をいやし、いのちを救うために使われるべきです」とミサで語っている」

吉田事務局長は、ひとり20筆の署名を集めました。この行動に飛び入り参加した若者は「僕もいっしょに撒きます」と言い友だちと待ち合わせするための時間を使ってチラシを配ってくれました(写真右端)。

ミナミ、吹田平和委員会からも参加し、署名集めとチラシ配りを行いました。



平和友好団体宣伝行動

—大阪市なくしたらあかん—

9月22日午後大阪平和友好3団体(安保・原水協・平和委員会)は「明るい会」の要請に応じ、福島区に宣伝に入りました。

参加者7名は、福島区の「明るい会」事務所(山田みどりさん(会員)の指示に従って3グループに分かれ、海老江6丁目など3カ所(明るい会)のビラ計1000枚ほどを全戸配布しました。目的地に行く途中も通行人にビラを渡し、「大阪市なくしたらあかん」と訴えると、「わかってる」と反応が返ってきました。なお、北区平和委員会からも2名参加しました。

大阪平和友好団体連絡会は住民投票の告示日にあたる10月12日正午より小一時間にわたり空堀商店街で昼食を取りにでてきたサラリーマンを主なターゲットにして「ランチタイム宣伝行動」を18人で実施しました。参加者は、「都構想反対!」「大阪市の力でコロナ対策を!」「大阪を廃止し特別区を設置することに反対」と表示した厚手のプラカードを首にかけて交差点



に立ち、通行人に「住民投票まるわかり」パンフを配り、「大阪市なくさんといて」と呼びかけました。

大保連の若い組合員も昼食休憩を利用しこの行動に10名参加し、通りがかる人に大阪市を廃止し特別区を設置することに反対か賛成かシールで投票してもらう行動も行いました。

大保連の若い人たちの参加で一層元気の出る宣伝行動でした。

会員百人達成 都島総会

9月19日(土) 都島平和の会第4回総会が開催されました。当初は6月開催の予定でしたが

コロナ感染の心配があり、延び延びになっていたものです。大阪市廃止の是非を問う住民投票での勝利に向けた運動に力点を置く関係もあり、また、会場も「3蜜」を避けるため人数制限を設けました。

会員目標100人を3人超過で達成し、喜びの中で迎えた総会だけに、いい雰囲気の中、これからやっていきたいことなど気軽に話し合いました。



一人が一人を増やす誰でもできる「仲間増やし」運動が議案書でも強調されました。拡大表彰も行いました。

この総会には近藤正・大阪平和委員会理事長もお祝いに駆け付けました。

大阪城歴史散策

9月25日(金)大雨のなか、天王寺平和委員会は、大阪城の戦跡に新しく説明版が設置されたのを機に、森田敏彦さん(会員)のガイドで大阪城戦跡ウォッチングを行いました。

防空通信隊本部跡、天守閣防弾跡、山里丸の国防館跡、砲兵工廠化学分析場を訪れました。

今年3月に文化庁が設置した説明版は、日本語と英語の2言語表記になっていて、QRコードにスマホをあてると、朝鮮語、中国語等の説明も見られる便利なものになっていました。

このウォッチングには新聞記事を見て女性が飛び入り参加しました。以下はその感想文。「日ごろ慣れ親しんでいる大阪城の知らなかった面をたくさん教えていただいて大変勉強に



なりました。ありがとうございました」

この方は夜間中学をテーマにしたドキュメンタリー「こんばんはII」の上映運動中です。機会があれば鑑賞(在庫あり)し、上映運動に協力しましょう。

浪速市聖のじぶやき

爺76才の半生、誕生日に青春期に思った事を何処まで果たしたのか、それとも否か...

浪花市聖 小谷 静良76才 8月27日は、私の76才の誕生日である。私は60年前を省みた。大阪を去り、和歌山県高野山の宿坊の門を叩き、寺の小僧となる。高校通学と寺小僧で暮らした。中学の頃より日活青春ドラマが大好きで吉永小百合の大ファンであった。彼女は私と同学年。3月生まれ。ちょうど6日前の8月21日昼1時NHKBSPレミアムで出演する映画『愛と死の記録』が放映された。

この作品は54年前1966年の映画である。幼い時被爆した印刷工の青年(渡哲也)と楽器店員(吉永小百合)の純愛物語とその逝去。青春期に被爆による再発で病の人となる彼、支える彼女。夢ある前途を引き裂かれていく姿が哀れである。原子爆弾が投下されていなければ被爆体もなかった。結果、私の視点は固まって行き、反核、反原発、反戦平和、護憲、基本的人権の尊重、無差別平等を志す人になってい



った。生業はと他者に言われたら、葬式坊さん兼鍼灸師と答える。ある時は法衣をつけ経を唱え、ある時は病の人に鍼灸をすすめる。そして平和運動に志す。時々、講師に呼ばれ、お話を始める。人びとに育んでいただいた。日々好日の姿である。しかし、私も年を重ね、足腰が弱くなり、杖をつきながらしか歩めなくなってきた。もう残された時は少なくなっていく。 ≪元・大阪宗教者平和協議会 副理事長、元・鍼灸師≫

【コロナ禍のなかお薦めの図書】

- 「給食の歴史」藤原辰史著 岩波新書 1960年代にさえ給食で栄養補給をしていた子どもたちがたくさんいたことを知った。
- 「戦争と農業」藤原辰史著 インターナショナル新書 トラクターが戦車に、毒ガスが農薬に変えられることが語られている。戦争と農業が密接にむすびついている。
- 「カブラの冬」藤原辰史著 人文書院 カブラの冬とは1916年から17年飢饉のため600万人のドイツ国民が餓死したことを指す。この経験に学んだナチスは、ロマやユダヤ人の居住地や食料を取り上げ、それを国民に回す政策をとり、国民の支持をとりつけた。